

Title	経済学関係文献目録
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.4 (1954. 4) ,p.463(133)- 464(134)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540401-0133">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540401-0133</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

も顯著なものはセルフサービスの實施と現金持歸り制の導入である。しかし乍ら此等の工夫はサービスそのものの生産性を高めることによつてもたらされる總配給費における節約と云ふよりは、むしろ費用の中の若干を小賣商から消費者に移轉せしめたにすぎないものである。たしかにセルフサービスの下においては消費者は自らすべてをなさねばならないのであるが、しかし「消費者の多くはそうすることを左程気にしているようでもなく、むしろ彼等はセルフサービス店における気軽な購買をたのしんでいるかのようである。又電話注文、信用販賣、配達制度の廢止は、これらのサービスの負擔を小賣商から顧客へ移讓すること以上の何物でもないが、かかる結果としての小賣経費の節約は、少くとも今日までに關する限りでは、小賣商業にとつての積極的進歩とみなしうるものの一つである」。

最近の小賣商業の分野においてみられる新たな動きとしては、大都市小賣商業の分散化の傾向である。都心における購買が殆んど不可能な程に交通が輻輳した今日その住宅地をひかえた近郊にブランチを設置することは當然のことであるが、この傾向と相平行して不動産會社又は強力な小賣商社のイニシアティヴの下に推進せしめられつつある新しい購買の中心地の建設と云う計畫がある。更にはチェン・ジュニア・デパートの開設計畫などこれら一連の動きは都心から外郊に向つての一つの分散化の傾向と云うことが出来よう。又労働組合に依る小

賣配給の經營も戦後の一つの特色であるが、果してかかる消費協同組合が十分の成果を収めうるか否か極めて興味深い問題を提起している。又販賣能率を強調する結果、店舗の機構を單純且つ流線型化せんとする傾向が愈々強くなつて來ており、このことは「店舗を建築家の勞作としてではなく一個の販賣機械としてみようとするものである」。即ちそれは店舗及びその設備が顧客にとつて財貨の購入をより容易且つ快適になしうよう配置設計せられた販賣機關として役立たしめようとするものである。かかる努力は配給費の節約をその經營内部に求めようとするものであるが、しかし特に戦後においては、小賣店の經營主は「彼の經營の改善に依つてと云うよりは、むしろ全く別系統の商品を販賣することにより又は新商品の販賣促進策をとることによつて他に先んじよう」とつとめてゐる。それについて殆んど又は全く經驗のない種類の商品にまで手を擴げることによつてその販賣高を大ならしめんとする努力が實質的なをとして恒久的な成功を収めうるか否かは極めて疑問である。むしろ小賣經營の成功は、經營内部の無駄を發見せんとする意圖から出發せる「特定の小賣活動の集約的研究から生じて來ると思われ

(片岡 一郎)

### 經濟學關係文獻目錄

(昭和二十八年十一月—十二月)

**理論 (學說史・經濟思想)**

- \* 經濟變動の理論 ケアステッド著 酒井正三郎譯 A5 三二二頁 四七〇圓 中央經濟社
- \* ケインズ經濟學研究 川口弘著 A5 四〇五頁 五〇〇圓 中大出版社
- \* 經濟學の生誕 内田義彦著 A5 三三六頁 四五〇圓 未來社
- \* 貨幣經濟的循環の理論(經濟學選書) A5 二四〇頁 四五〇圓 有斐閣
- \* 純粹經濟學要論 上(岩波文庫) ワルラス著 手塚壽郎譯 A6 三五七頁 一六〇圓 岩波書店
- \* 一般經濟學 岩田耕作者 B6 二〇五頁 二〇〇圓 千城書店
- \* 最大利潤の原理と計算 山田勇著 A5 一五五頁 二五〇圓 春秋社

**財政・金融 (保險・證券)**

- \* 貨幣理論と財政政策 ハンセン著 小原敬士・伊東政吉譯 A5 二七五頁 四八〇圓 有斐閣

**商工業・經營・會計**

- \* 複式簿記生成發達史論 江村稔著 A5 三九七頁 六五〇圓

**圖**

- \* 明解商業簿記改訂版 中山庚子男著 B6 五一〇頁 三三〇圓 中央經濟社
- \* 公益企業論序説 北久一著 B6 二一三頁 二五〇圓 東洋經濟社
- \* 經營講座2 ヘイエル監修 橋井眞日本版監修 三三五頁 七〇〇圓 技報堂

**勞働・社會政策**

- \* 賃銀理論と賃銀闘争(現代新書) 勞働調査協議會編 B6 三二二頁 二八〇圓 社會書房
- \* 日本勞働組合評議會史 上(青木文庫) 谷口善太郎著 A6 二一三頁 八〇圓 青木書店
- \* 日本社會の住宅問題 宅地住宅總合研究2 東京大學社會科學研究所編 A5 二九八頁 四八〇圓 東京大學出版會

**歴史**

- \* 日本經濟史 野村兼太郎著 有斐閣全書 B6 三六六頁 二五〇圓 有斐閣
- \* 近世經濟史の研究 藤田五郎著 A5 二七一頁 四〇〇圓 御茶の水書房
- \* 近世農村社會の研究 兒玉幸多著 A5 五六六頁 八七〇圓 吉川弘文館

社會思想

- \* 唯物論と經濟批判論(國民文庫) レーニン著 寺澤恒信譯 A 6 二六一頁 一〇〇圓 國民文庫社
- \* 帝國主義論(創元文庫) カウツキー著 波多野看譯 A 5 一二五頁 六〇圓 創元社
- \* ロシア・マレンコフ以後 ドイツチャー著 山西英一譯 B 6 二二二頁 二五〇圓 光文社
- \* 社會主義小史 マツケンジ著 松本俊朗譯 B 6 二九九頁 二八〇圓 創元社
- \* アメリカの支配者 上 ロチヌター著 立井海洋著 B 6 三七八頁 三八〇圓 三一書房
- \* イデオロギーとしての自由主義の没落(現代社會科學叢書) ハロウエル著 石上良平著 B 6 二七一頁 二八〇圓 創元社
- \* 植民地・從屬國の歴史 2 ロストフスキー他監修 園部四郎譯 B 6 三五八頁 三五〇圓 三一書房
- \* フランス社會運動史 須藤博忠著 A 5 二七四頁 三三二圓 立花書房

經濟事情

- \* 日本資本主義講座 2 戒能通孝編 A 5 四一五頁 二八〇圓 岩波書店
- \* 日本資本主義講座 2 小椋廣勝編 A 5 三九六頁 二八〇圓 岩波書店
- \* 日本農業の近代化 吉岡金市著 A 5 四二二頁 六三〇圓 有斐閣
- \* スターリング地域—その産業と貿易—カツセルズ著 後藤譽

之助他譯 B 5 八六九頁 五〇〇〇圓 時事通信社

辭書年鑑

- \* 日本經濟四季報 3 一九五三年第三期 日本經濟調查會編 B 6 三〇七頁 二五〇圓 大月書店
- \* 日本經濟年報 1 昭和二十九年第一集 東洋經濟新報社編 B 6 二二二頁 一八〇圓 東洋經濟新報社
- \* 勞働經濟四季報 2 一九五三年七月九月 勞働經濟研究所編 B 6 三〇八頁 二五〇圓 勞働經濟社
- \* 世男經濟年報 一九五三年 第三・四半期 世界經濟研究所編 B 6 三〇五頁 二五〇圓 大月書店

編集後記

戦後わが國の社會科學の領域で、特に實證性が強調されている。問題を思辨的ではなく、經驗主義に立脚して説明することは、社會科學の常道といえよう。しかし實證性が個々の事實の雜然たる蒐集を意味しない限り、理論が問題となる。例えば、A・スミス、Kマルクス、M・ウェーバーはすべて經驗主義者として特徴付けることができるが、彼らが理論的にひき出している結論には相違がある。スミスは「見えざる手」への信頼を背景として、近代社會の前途を樂觀的にみていたようだ。彼が對象とした「商業社會」は、いわば等身大の近代社會ではなく、従つて彼はそれが孕んでいる問題の核心に、メスを深く入れなかつたのではないか。一九世紀も後半になると、近代社會の困難は次第に歴然たるものとなつてくる。ウェーバーは、資本主義の精神をプロテスタンティズムの禁欲倫理との關連において分析している。近代社會の前途に對して對して、疑惑を表明している。この社會批判は、理論と實踐との間の深淵によつて、多少とも緩和されている。しかるにマルクスの場合には、批判はラジカルにされる。彼の理論は階級闘争を導きの糸として、資本主義社會の克服に向つてゐる。現實の社會が内包している問題が根本的であればある程、理論的反省も深刻である筈だ。學問的立場の相違を解きえない世界觀の對立に還元してしまふことは、安易になさるべきではなからう。

(青沼吉松)

昭和二十九年三月二十五日印刷  
昭和二十九年四月一日發行

第四十七卷 定價 七〇圓  
第四號 送料 八圓

東京都港區芝三田慶大經濟學部内  
編輯者 氣賀健三  
發行所 圖書印刷株式會社  
東京都港區芝三田豐岡町八  
印刷所 川口芳太郎

豫約購讀料  
一年分 金八四〇圓(送料共)  
半ケ年分 金四二〇圓(〃)

東京都港區芝三田二丁目  
慶應義塾大學經濟學部研究室内  
發行所 慶應義塾經濟學部